



特集

琵琶湖のコイ・フナ の東アジアの中の湖と人

マコモ、ヨシが茂り、ヤナギが生える湖岸。在来種のすみかだったが、今では外来種のオオクチバスやブルーギルばかり



湖岸から離れた田んぼの水路。ここには外来種がいない



湖岸近くの田んぼの水路。ここも外来種が多い

旧市街地を流れる水路。ここにも外来種はいない



新興住宅地を流れる水路もともと田んぼの水路、在来種が以外と多い

琵琶湖博物館では、開館以来、館内外のさまざまな分野の研究者が集まり、東アジアの中にある琵琶湖の環境史に関する研究プロジェクトを実施してきました。そこでは、人間ではなくコイ科魚類を、環境変化の歴史をみる中心にすえました。コイ科魚類は、東アジアという広大な地域で、長期にわたって展開を遂げてきたという特徴をもつ魚であること、その一方で、田んぼや家の前の水路などにもいる魚で、近江に暮らす人々にとっては、フナずしや煮付けの食材として暮らしに密着した魚でもあったからです。

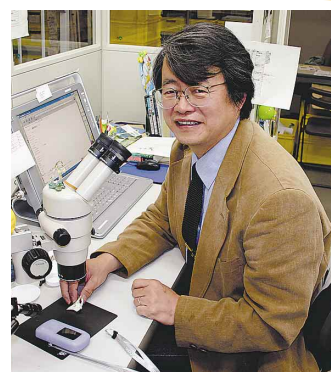
企画展示は、その壮大な物語をお芝居の進行のように展示します。展示でも案内役を務めるフナさんに企画展示を紹介してもらいましょう。

プロlogue こんなところにコイ・フナ

マコモ・ヨシが茂りヤナギが生える湖岸、水草が生える湖岸近くの田んぼの水路、湖岸から離れた流れのある水路、新興住宅地の中を流れる水路、旧市街地を流れる水路、これら5つの水環境の中で、私たちの仲間が多く生息しているのはどこでしょう。

第1幕 コイ・フナはどこから来たのか

私たちの仲間は、恐竜が地球上を闊歩していた白亜紀末に、現在ではヒマラヤがそびえているあたりで誕生したようです。その後、ヒマラヤやチベットの上昇が、アジアのモンスーン気候を生み、雨季と乾季という水をめぐる一年のサイクルが生まれました。私たちはこの基本サイクルにあわせて生活するようになりました。ところで、コイさんの自慢は、地球上に私（フナさん）より先に生まれたことです。世界で一番古い化石が、長崎県のおよそ2500万年前の地層から見つかっています。この頃には、



上席総括学芸員 中島経夫 (魚類形態学)

▼世界最古のコイ属の咽頭歯化石。長崎県佐世保層群(漸新統)産 *Cyprinus (Mesocyprinus)* sp.



最新型のフナ、ゲンゴロウフナ

私（フナさん）の自慢は、コイさんより新しく生まれた新型の魚だということです。私が生まれたのは、昔の琵琶湖が誕生するより少し前の500万年程前のことです。その後、コイさんにかわって琵琶湖の主役になります。およ

下之郷遺跡から出土したゲンゴロウブナの
エラブタの骨



弥生時代中期の下之郷遺跡の復元図
(守山市教育委員会提供)



そ50万年前には、新型のゲンゴロウ
ブナも生まれています。

第2幕

コイ・フナ、ヒトと出会う

古くから人には出会っていましたが、琵琶湖のまわりの人間たちと本格的に出会ったのは、およそ6000年前、人間の時代という縄文時代になってからです。私たちが、雨が降る産卵の時期になって、水に浸かったヨシ場に卵を産み出かけていくと、人間が待ちかまえているようになりまし。人間たちは、私たちが重要な食料としていたのです。たくさんいる私たちは、大量にとられて保存食にされました。私たちの生活パターンに合わせ、人間たちも生活を組み立てていたようです。

その後人間たちは、湖へそぞろ川ぞいに浅い水場(田んぼ)を作り始めました。それは私たちに、都合のよい産卵場となりました。人間につか

フナが描かれた弥生時代の銅鐃
(野洲市歴史民俗博物館)

まる危険はありますが、子供たちには安全で、しかも餌が豊富なので、田んぼを利用しない手はありません。また、コイさんの中には、人間に管理された生活を始めるものもいたようです。このようにして私たちは、

人間たちとの関係を深めていきました。

第3幕

コイ・フナ、銭になる

今からおよそ7000年前、人間の時代という鎌倉時代ごろを境として、人間たちはよくわからない行動をとるようになりまし。私たちがつかまえてまで捕まえようとしたかと思つと、せつかくつかまってあげた私たちが放したりするのは(殺生禁断)。こうした人間たちの優柔不断さは、人間がシカやイノシシを食べなくなつたことと関係しているようです。

京でも私たちの人気はこのほり、ではなくうなぎのほりです。とりわけ私たちの価値が、丸い銅(銭)の数ではかれるようになってからは、ますますいるんなところへ連れて行かれるようになりまし。

鳥や魚のなかの一番人気はコイさんでしたが、琵琶湖のフナさんも評判で、私たちがどのように食べようかという工夫をこらしていたようです。まな板の上に載せられるのはいい気分ではありませんが、それよりも海からやってきたタイのやつらが幅を利かせ始めたことの方が気になります。

第4幕

コイ・フナとヒトとの知恵くらべ

時代によって中身はいろいろ変わり

ましたが、人間たちとの付き合いは、ごく最近までつづいてきました。私たちがつかまえるために、いろいろな漁の道具を人間たちは作りだしました。

およそ7000年前ごろから急に発達したエリは、琵琶湖の沖にハリスをのばし大型化してきたので、沖合いをぼんやり漂つてもいられなくなりました。

また、だれがいつ考え出したかはわかりませんが、米づくりで忙しい人間たちは、手間をかけずに私たちをつかまえる方法も考えだしました。農作業のかたわら、私たちが行き来する湖岸や水路にタツベやモンドリという道具をしかけておくのです。うっかりした私たちをつかまえてオカズにしよう、というわけです。

人間との知恵くらべはいつも命がけだったのですが、そうやって私たちをつかまえた思い出を楽しく話そう人間たちは、琵琶湖のまわりに今でもたくさんいるそうです。人間には楽しい出でしようが、私たちににとっては楽しいどころではありません。



フナをとるためのタツベ(草津市北山田)

エピソード コイ・フナの生きる道

人間がやってくる前から私たちは湖にすんでいました。やがて、後からやってきた人間たちとの知恵くらべがはじまりました。そうやって私たちは数千年の歳月を生きぬいてきたのです。ところが、ほんの数十年前から様子が変わり始めました。琵琶湖は近畿の水ガメだとか、水路をパイプラインにしようといった意見が現れ、人間は、私たちにあまり関心をはらわなくなりました。その頃から、琵琶湖の環境も大きく変わりはじめたのです。私たちが産卵の場所にしてきたヨシ場はめっきり減ってしまい、人間たちがこしらえた、川ぞいの浅い水場（田んぼ）へも入っていくことができなくなりました。人間につかまりたくはないのですが、ヨシ場や田んぼで産卵できなくなったら、どうやって子どもを残していけばよいのでしょうか。

ところで、世の中には、人間たちがあまり入ってこない自然保護区というところがあるようです。そこでの心配といえば、鳥や他の魚たちとの知恵くらべくらいだろうと思つたので、それには勝つ自信がありますが、保護区という限られた場所では生きていけないのであれば、住める場所は今よりも狭くなり、仲間たちもどんどん減っていくようにも思います。

一方、養殖池という場所も人間たちはつくっています。ここでは、採卵されたり品種改良されたりしながらでも子孫を残し、種としては生きのびていくこともできるでしょう。でも、人間たちの好みはともうろさそうなので、養殖では、値打ちがあると判断された仲間だけが選ばれているようです。では、私たちの生きる道は他にないのでしょうか。きつとあると思います。なんと



中国湖南省岳陽県にある広大な養殖場

ギンブナの種苗をえるための採卵。コイの精子で受精させる

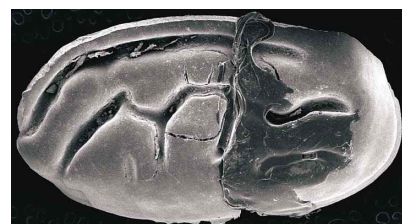


も数千年の付き合いなのですから。

今回の企画展示の概要をフナさんに紹介してもらいましたが、もう一度この展示のもとになった研究プロジェクトについてお話ししたいと思います。この研究を始めたいきっかけは、縄文時代の遺跡からいくつもの絶滅種や現在の日本列島には分布していない魚の咽頭歯を発見したことでした。

これらの魚の絶滅は人間の活動がかかわっているはずで、琵琶湖やそこにすむ魚たちの現在の姿を作り出したのは、自然の歴史だけでは考えることができないだろうと感じました。そのため、社会や文化を対象とする研究者と一緒に、魚と人間との間にどのような関係の歴史があったのかを考えてきました。その結果、この研究に関わったそれぞれの研究者から多くの研究成果が出され、フナさんが紹介したこの記事も企画展示もそれらの成果がもとになっています。

この研究プロジェクトでは、コイ科魚類という魚を、人が登場する以前の時代も含め、長い時間の中での環境の移り変わりをみる中心にしてみました。その結果、東アジアのモンスーン気候が生み出す基本的な変動のサイクルに注目し、それを意識しながら、琵琶湖での魚と人との関係を見てきました。魚と人との関係は時代によって変化してきましたが、魚との関係を維持する基本的なパタ



縄文時代前期の赤野井湾湖底遺跡から出土したコイ属の絶滅種の咽頭歯



縄文時代中期の粟津湖底遺跡第3貝塚から出土したクセノキブリスの咽頭歯

ーンはあまり変化していません。これからはそれを維持していこうとするならば、そのパターンを変えないほうが良いのかもしれないと私たちは考えています。

第15回琵琶湖博物館企画展示

琵琶湖のコイ・フナの物語

東アジアの中の湖と人

7月14日(土)~11月25日(日)

場所: 博物館企画展示室

企画展示関連シンポジウム

東アジアにおける生き物と人

これからの関係を探る

7月28日(土)・29日(日)

場所: 博物館ホール、博物館周辺